

動詞の名詞化と機能動詞構造 —動作名詞 Diskussion の場合—

納谷 昌宏

外国語教育講座（ドイツ語）

Über die Nominalisierungen von Verben und Funktionsverbgefügen —das Beispiel des Nomen Actionis „Diskussion“—

Masahiro NAYA

Department of Foreign Languages. Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. はじめに

現代ドイツ語には動詞を名詞化し、それを文法的機能しか有しない機能動詞とともに用いる機能動詞構造という表現形式が存在する。たとえば、

- (1) Das Komitee stellt das Problem zur Diskussion.

委員会はその問題を討議に付す

例文(1)は、基礎動詞（本稿では動作名詞が派生された元の動詞を基礎動詞と呼ぶ）である *diskutieren* が名詞化されて *Diskussion* となり、それが前置詞 *zu* を介して機能動詞 *stellen* と結合したものである。この表現は次の基礎動詞を用いた表現の「書き換え」であるとされる。

- (2) Das Komitee diskutiert das Problem.

委員会はその問題を討議する

そもそも言語には同じ表現価値を有する表現形式は存在しないのであって、例文(1)と(2)についてもそれぞれ表現価値は異なっている。例文(2)は問題を討議するという事実を述べているに過ぎないが、例文(1)は問題を討議の場に提出するという意味であり、実際に討議されるのは将来のことである。では機能動詞構造の如何なる働きによってこうした表現価値が付加されるのであろうか。本稿では「議論」を表す動詞 *diskutieren* について、それが名詞化された動作名詞 *Diskussion*、およびそれを構成要素とする機能動詞構造を考察対象とし、コーパスを用いた実証的分析によりその表現機能を明らかにする。そし

て語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure、以下 LCS と略す)¹ の分析により生成メカニズムを解明したいと思う。手順は次の通りである。

- 1) コーパスによる例文収集
- 2) 機能動詞構造の表現機能の分析
- 3) 生成メカニズムの解明

本稿で特に「議論」を表す機能動詞構造を取り上げる理由は、前置詞格タイプだけではなく4格タイプの構造を有するなど発話動詞の中でも機能動詞構造自体のヴァリエーションが豊富であること、そしてこのヴァリエーションが如何なるメカニズムに基づくものであるのかを解明する必要があると考えるからである。なお機能動詞構造の解明が発話動詞全体の意味構造の解明に繋がればと考えている。

2. コーパスによる例文収集

IDS (Institut für Deutsche Sprache) Mannheim のコーパスである「Cosmas II」を利用して、動作名詞 Diskussion を用いた機能動詞構造の例文収集を行った。表1は機能動詞 (bringen, setzen, stellen) との結合可能性を調査したものである。

表1

	bringen	setzen	stellen
zur Diskussion	69	4	3801

分析の結果、前置詞 zu を介して圧倒的に動詞 stellen との結合を示す例が多いことがわかった。次にその例 (bringen, stellen) を挙げておこう。

- (3) Diesen Vorschlag sollen die Delegierten in ihren Gemeinden **zur Diskussion bringen**, bat der Präsident. (St. Galler Tagblatt, 22.11.1999)

長官は代表委員にこの提案を自分の地区に持ち帰って議論して欲しいと頼んだ。

- (4) Er wolle das zur Sprache bringen, was der Innenminister nicht **zur Diskussion stellen** könne. (Vorarlberger Nachrichten, 01.07.2000)

彼は内務大臣が議論出来なかったことを話そうとしているようだ。

表2

	kommen	gehen	gelangen
zur Diskussion	42	2	5

表2は機能動詞 (kommen, gehen, gelangen) との結合可能性を示したものである。結合す

る例は少ないが、ここでは機能動詞 **kommen** の例のみを挙げておこう。

- (5) Das hochexplosive Problem Jerusalem soll erst zu einem späteren Zeitpunkt **zur Diskussion kommen**. (Salzburger Nachrichten, 20.05.2000)

エルサレムの重大な問題は後になってから議論に付すべきです。

表3

	sein	bleiben	stehen
zur Diskussion	0	3	2422

表3は機能動詞 (sein, bleiben, stehen) との結合可能性を示したものである。stehen と結合する例を挙げておこう。

- (6) Wie könnte ein Zeitplan aussehen? Diese und andere Fragen werden an diesem Abend **zur Diskussion stehen**. (St. Galler Tagblatt, 24.03.1999)

スケジュールはどんなものか。あれやこれやの問題が今晚議論されるだろう。

次の表4は機能動詞 (machen, leisten, führen) との結合可能性を示したものである。これらの動詞の場合、動作名詞は4格目的語で表示される。

表4

	machen	leisten	führen
Diskussion	4	9	2108

machen や leisten に比べ、機能動詞 führen と結合する例が圧倒的に多い。その例を次に挙げておく。

- (7) Das werden wir 2002 entscheiden. Darüber muss man jetzt keine aufgeregte **Diskussion führen**. (Mannheimer Morgen, 14.03.2001)

それは2002年に決定しましょう。それについては今ここで激しく議論するのは控えなければなりません。

以上、動作名詞 Diskussion の機能動詞との結合可能性を示した。この調査により前置詞タイプの例では stellen と stehen が、4格タイプでは führen と結合する例が圧倒的に多いことが判明した。結合の分布に偏りが見られるが、これは動作名詞の意味論的特徴に基づくもので詳細な分析が必要である。ここでは特に他動詞、自動詞 (行為、移動、状態) などの相違に視点を据え、LCSに基づく分析を行いたいと思う。

3. 機能動詞構造の表現機能

次に機能動詞構造の表現機能について述べる。たとえばLangenscheidtの辞書²には動詞diskutierenについて、その1の項目としてjemand diskutiert mit jemandem über etw. が挙げられ、zwei od. mehrere Personen führen ein relativ langes Gespräch über ein Thema (二ないし数名の人があるテーマについて比較的長い会話を行う)との説明がある。そして2の項目として〈ein Ausschuß o.ä.〉diskutiert etw. とあり、eine Gruppe von Personen erörtert verschiedene Aspekte eines Themas, damit jeder seine Meinung dazu sagen kann (〈委員会などの〉グループが各自自分の意見を述べるためにあるテーマのさまざまな側面を討議する)との説明がある。またKlappenbachの辞書³にはdiskutierenの項目にまずetw. mit jmdm.in wechselseitiger Aussprache erörtern, besprechen, debattierenという説明がありetw. diskutierenの例文が、そして次にüber ein Projekt, über einen Vorschlagとの記述がありüber etw.diskutierenの例文が挙げられている。またDudenの辞書⁴では最初にüber etw. d.の例が、次にetw. d.の例が挙げられている。こうしたさまざまな辞書の記述からも動詞diskutierenには前置詞格目的語を伴う自動詞としての用法と4格目的語を伴う他動詞としての用法があることが認められよう。こうした自動詞と他動詞の用法について、その受動文や対応する機能動詞構造文との比較をしつつ、その表現機能の分析を行う。次の文は動詞diskutierenの自動詞としての例である。

(8) Das Komitee diskutiert über das Problem.

委員会がその問題について議論する

例文(8)はdas Problemが前置詞格目的語として置かれている。さて次は基礎動詞を名詞化してDiskussionとし、機能動詞führenの4格目的語として置かれている例である。

(9) Das Komitee führt eine Diskussion über das Problem.

この場合(9)は(8)の書き換え(項構造が同じ)となっているが、その表現機能は異なる。たとえば(8)の前置詞格目的語über das Problemは削除できないが、(9)の場合は削除可能である。(9)の場合は前置詞格目的語ではなく、付加語にすぎないからである。

(10a) * Das Komitee diskutiert.

(10b) Das Komitee führt eine Diskussion.

ここで前置詞格目的語が削除可能であることは、「議論」の対象に目を向けることなく「議論」という動作そのものに視点を据える表現であることを示すものである。つまりdiskutierenという動詞による表現(8)は、das Problemという対象に対する働きかけ(結果を含まない)を表すのに対して、機能動詞構造による表現(9)は主語の動作そのものを強調した表現となっているのである。さて次は動詞diskutierenの他動詞としての用法である。

(11) Das Komitee diskutiert das Problem.

この場合、das Problemが4格目的語として置かれており、対象に対する行為（結果を含む）を表す。つまり委員による討議の結果、das Problemに何らかの影響が及ぶ可能性があるのである。さて次は基礎動詞を名詞化してDiskussionとし、前置詞zuを介して機能動詞stellenと結びついた例である。

(12) Das Komitee stellt das Problem zur Diskussion.

この文は(11)の書き換えとなっているが、表現価値は全く異なる。日本語では「討議に付す」と訳されるが、文字通り問題を討議の場に提出するという意味であり、実際に討議されるのは将来のことである。さて次の例は動詞diskutierenを用いた(11)の受動文である。

(13) Das Problem wird diskutiert.

次は動作名詞Diskussionが前置詞zuを介して機能動詞stehenと結びついた例である。

(14) Das Problem steht zur Diskussion.

この例は受動文(13)の書き換えとなっているが、問題が討議の場に提出されているという意味であり、将来の討議に向けた準備が整っているという意味である。動詞diskutierenとその受動文、そしてその書き換えとなる機能動詞構造文は以上のような表現機能を有しているのである。

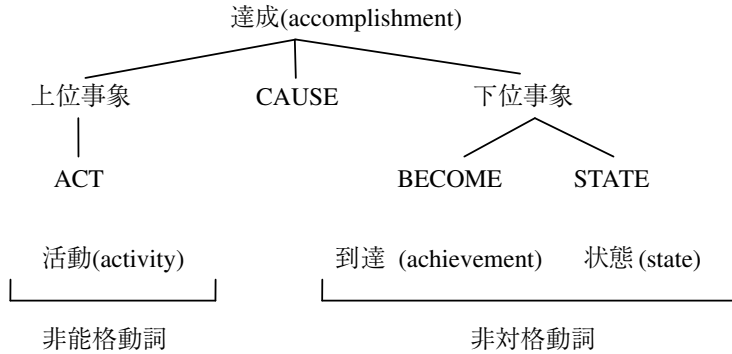
4. 生成メカニズム

本稿における生成メカニズムの分析ではLCSを用いて生成メカニズムを解明したいと思う。影山(1996)はLCSについて次のようなモデルを提示して説明している。そもそもLCSの全体(達成accomplishment)は上位事象と下位事象から成り、上位事象と下位事象はオペレータであるCAUSEで繋がれる。上位事象はACT(活動activity)、下位事象はBECOME(到達achievement)とSTATE(状態state)から成る。全ての動詞は上位事象のみから成るもの(非能格動詞)、下位事象から成るもの(非対格動詞)、そして上位事象と下位事象の結合から成るもの(使役他動詞)に分類される。

非能格動詞：上位事象

非対格動詞：下位事象

使役他動詞：上位事象+下位事象



本稿で取り上げる機能動詞のうち自動詞 *sein*, *bleiben*, *stehen* は状態 STATE を表す非対格動詞、また自動詞 *kommen*, *gehen*, *gelangen* は到達 BECOME を表す非対格動詞に分類される。また使役他動詞 *bringen*, *setzen*, *stellen* および *machen*, *leisten*, *führen* は上位事象と下位事象が CAUSE によって結ばれた達成動詞に分類される。

前章では動詞 *diskutieren* に自動詞と他動詞の用法があることを確認したが、ドイツ語の *Valenz 辞典* (Helbig/Schenkel) には次のような文構造に関する記載がある。⁵

- I *diskutieren*₁₊₍₂₎₌₃
- II *diskutieren* → Sn, (Sa/p₁S/NS_{daß, w, ob}), (p₂S)
- III Sn → 1. Hum (*Die Studenten diskutieren.*)
2. Abstr. (als Hum) (*Die VEBs diskutieren den Plan*)
- Sa → Abstr (*Sie diskutieren die Planaufgaben*)
- P₁ = über
- p₁Sa → keine Selektionsbeschränkungen (*Sie diskutieren über den Studenten*)
- NS → Act (*Sie diskutieren darüber, daß~/wer~/ob*)
- P₂ = mit
- p₂Sd → Hum (*Er diskutiert mit seinem Freund die Probleme*)

以上の記述に基づき4格目的語をとる場合と前置詞格目的語をとる動詞 *diskutieren* の2つの LCS を考えてみよう。影山 (1996) はいわゆる動能構文⁶の LCS を次のように表記している。本稿ではこれを A と表示する。

A : [event x ACT ON y]

そして4格目的語をとる他動詞の LCS を次のように表記している。これを B と表示する。

B : [event x ACT] CAUSE [event y BECOME]

Aの構造はyという対象に対して働きかけるだけで、yの変化は含意しない。これに対してBの構造はxの行為の結果、yが何らかの変化を被ることが表されている。このように基礎動詞 *diskutieren* の意味構造は、それぞれAとBの2種類があるのである。さて問題はこれら2つのLCSのうちどちらを主たるLCSと見做し、どちらを副としてのLCSと見做すのかということである。あるいはそれぞれを動詞 *diskutieren* の多義として、それぞれを主として見做すべきなのであろうか。我々はここで在間（1994）の発言に耳を傾けたい。

(15a) Er schüttelt den Baum. (彼は木を揺する)

(15b) Er schüttelt die Äpfel vom Baum. (彼は木からリンゴを揺すり落とす)

在間は当該の動詞を単純に多義語と解釈するのではなく、動詞の語義と統語構造との相互作用によって新しい意味単位が生成されると解釈するべきであると述べている。⁷ 動詞 *schütteln* はあくまで「揺する」という意味であり、それがb文においては *die Äpfel vom Baum* という統語構造と相互的に作用し合って、「落とす」という意味を形成している。こうした捉え方により動詞 *schütteln* の意味について、多義化メカニズムに基づく一般的記述が可能になると述べている。本稿でもこうした考え方を採用したい。すると動詞 *diskutieren* の既述のAとBの2つのLCSは統語構造の働きによって生み出されたものであり、その核となる基本的意義は「議論する」という継続的行為そのものであるということになる。これをLCSで表すと次のようになろう。

X : [event x ACT]

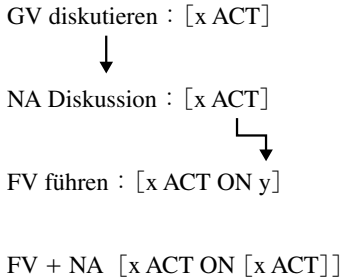
動詞 *diskutieren* が「主語 + V + 前置詞格目的語」という統語構造の中で用いられるとLCSのA : [event x ACT ON y] が生成され、「主語 + V + 4格目的語」の中で用いられるとLCSのB : [event x ACT] CAUSE [event y BECOME] が生成されるのである。さて動詞 *diskutieren* が名詞化され *Diskussion* になるとこのLCSはどうなるのであろうか。Grimshaw（1990）は動作名詞 *Nomen Actionis* もLCSを有すると述べている。そもそも名詞が動詞の意味を有する動作名詞である限り、LCSを有すると考えてよからう。ではLCSのAなのかBなのか、あるいはXのLCSが名詞化によって保持されるのか。この点については結合する機能動詞ごとに考えなければならないので、まずは機能動詞のLCSについて述べたいと思う。第1章において動作名詞 *Diskussion* と結合する機能動詞は、動作名詞を4格目的語にする場合、*führen* が圧倒的に多いことを確認した。たとえば、

(16) Er führt eine Diskussion über die Politik.

そもそも動詞 *führen* には「運ぶ、導く、営む、運用する」などの意味がある。しかし機能動詞として用いられた場合、いずれも「する、行う」という意味で使用される。動作名詞が本来の意味を担い、機能動詞は文字通り文法的機能しか遂行しないからである。こうした点から機能動詞 *führen* は次のLCSを有していると思ふことが出来よう。⁸

führen : [x ACT ON y]

「する、行う」はACT ONという術語で表される。項xは外項であり、yは働きかけの対象である。さてこの項yに動作名詞DiskussionのLCSが挿入されることになるが、これは既述のX : [x ACT] であると考えてよからう。図示すると次のようになる。



機能動詞の外項xと動作名詞の外項xに同一指示がかかり、これが主語にリンクされる。またACT ONはACTに統合され、結局 [x ACT] のLCSが生成されることになる。

Diskussion führen : [xi ACT ON [xi ACT]] → [x ACT]
同一指示

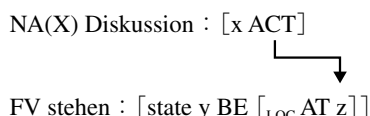
次に機能動詞stehenとstellenについて述べよう。⁹ そもそもstehenは「立っている、載っている、止まっている」などの意味があるが、機能動詞として用いられた場合、「～の状態である」という意味を有する。影山（1996）は静止状態のLCSを次のように表している。場所はz、そこに存在するものはyで表される。

stehen : [state y BE [_{Loc} AT z]]

stellenには「立たせる、置く、定める」などの意味があるが、機能動詞として用いられた場合、「～の状態に置く」という意味を有する。このLCSはstehenのLCSにCAUSEを付加したものとして表すことができよう。

stellen : [x CAUSE [state y BE [_{Loc} AT z]]]

さて動作名詞Diskussionが機能動詞stehenと結びつく場合、動作名詞のLCSが機能動詞のLCSの項zに挿入されることになる。では動作名詞の如何なるLCSが挿入されるのであろうか。既述のように動作名詞DiskussionはXのLCSから統語構造の働きによってAとBのLCSが生み出される。たとえばXのLCSが機能動詞stehenの項zに挿入されると仮定してみよう。



すると次のような統合LCSが得られることになる。

FV+NA(X) *[state y BE [_{Loc} AT TO [x ACT]]]

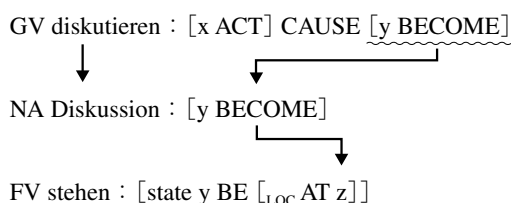
このLCSの場合、内項yが外項xの外側にあり、そもそもLCSとしては理論的に成立しない。同様にAとBのLCSが挿入される場合も成立は不可能である。

FV + NA(A) *[state y BE [_{Loc} AT TO [x ACT ON y]]]
 FV + NA(B) *[state y BE [_{Loc} AT TO [[x ACT] CAUSE [y BECOME]]]]

これらのLCSではいずれも内項yが外項xの外側に位置している。LCSとしては理論的に成立しないのである。このようにX、A、BのLCSがいずれも挿入不可能であり、しかも外項xがあってはならないとすると、内項yから成る下位事象の抽出を考えざるを得ない。影山（1999）は動作名詞（デキゴト名詞）の形成について次のように述べている。¹⁰

「基体動詞の語彙概念構造から任意のEventないしStateを取り立て、それを派生名詞の形式役割として設定する」

形式役割とはいわゆる特質構造 (Qualia Structure)¹¹ の一つであるが、語の外的属性、ここでは意味を担う部分のことを意味する。さて内項yが存在するのはLCSのBである。つまり動詞の名詞化により動作名詞が形成されると、BのLCSの下位事象の部分だけが抜き出されることになる。そしてそれが機能動詞の項zに挿入されることになるのである。



FV + NA zur Diskussion stehen : [state yi BE [_{Loc} AT TO [yi BECOME]]]
└──────────┘
同一指示

この統合LCSの項yには同一指示がかかり一つの項として実現する。なおここで述語ATの補足説明としてTOを導入しているが、このTOの導入により [y BECOME] の挿入が可能となっている。もしTOが導入されなければ [y BECOME] を挿入することは出来なく

なる。このTOの導入により、術語BEの内側に術語BECOMEが位置することが可能となり、将来議論される状況に向かう現在の状況が表現される。こうした表現が可能となるのは、術語TOの導入のお陰なのである。さて前章では zur Diskussion stehenが動詞diskutierenの受動文の書き換えとなっていることを確認した。

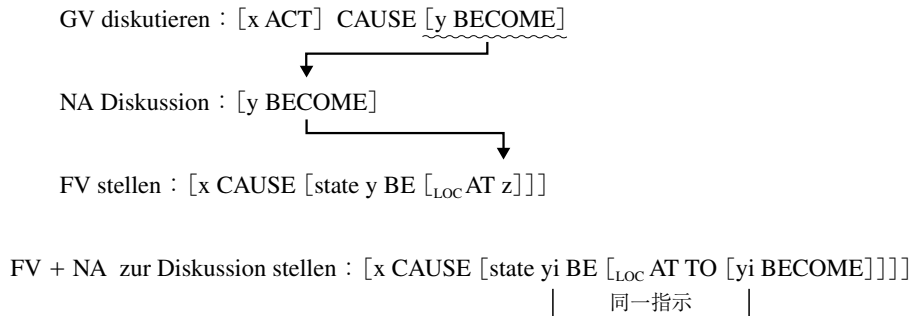
(13) Das Problem wird diskutiert.

(14) Das Problem steht zur Diskussion.

werdenを用いた受動文は外項xで表される動作主が文中で表示されていないものの、常に表示される可能性を含んだ表現である。たとえば、

(17) Das Problem wird (von dem Komitee) diskutiert.

werdenによる受動文はシンタクスレベルでの操作により外項xを消すわけであるが、機能動詞構造stehenを用いた表現は、意味論レベル（LCS）において外項xを消す操作をしているため、動作主の存在を完全に消去することが可能となっているのである。さて動作名詞Diskussionは機能動詞stellenとも結合する。その際、stehenの場合と同様に動作名詞のLCSの下位事象だけが抽出され、それが機能動詞の項zに挿入されることになる。



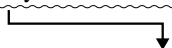
出来上がった統合LCSのyの項には同一指示がかかり、stellenの4格目的語として実現する。さて前章ではこの表現は動詞diskutierenを用いた表現の書き換えとなっていることを確認した。

(11) Das Komitee diskutiert das Problem.

(12) Das Komitee stellt das Problem zur Diskussion.

こうした書き換えの可能性は、それぞれの文に術語CAUSEが1つしか存在しないことに基づく。そしてそれは動詞が動作名詞になる際のLCSの抽出と密接な関係がある。もしLCSが抽出されず、LCSのB全体が機能動詞stellenの項zに挿入されると考えてみよう。

NA Diskussion : [x CAUSE [y BECOME]]



FV stellen : [x CAUSE [state y BE [_{Loc} AT z]]]

FV + NA zur Diskussion stellen :

[x CAUSE [state y BE [_{Loc} AT TO [x CAUSE [y BECOME]]]]]

この場合、術語CAUSEがLCSに2つ存在しており、この文はlassen文の書き換えでなければならないはずである。

(18) Er lässt das Komitee über das Problem diskutieren.

ところが実際は、例(11)と(12)で見たようにlassen文の書き換えではなく、普通のdiskutieren文の書き換えとなっている。これは統合LCSの中に術語CAUSEが1つしか存在しないことを示すものである。これこそ動詞diskutierenの名詞化の際に下位事象だけが抽出される証拠に他ならないのである。

5. さまざまな議論動詞

議論を表す動詞はdiskutierenだけではない。debattieren, erörternなどの動詞も議論を表す。動詞debattierenは前置詞格目的語をとる自動詞、4格目的語をとる他動詞としての用法があり、動詞diskutierenとほぼ同じ使われ方をする。

(19a) Das Komitee debattiert über das Problem.

(19b) Das Komitee debattiert das Problem.

また動作名詞Debatteは動作名詞Diskussionとほぼ同様の機能動詞との結合分布を示す。たとえば、

4格タイプ

(20) Das Komitee führt eine Debatte über das Problem.

前置詞格タイプ

(21) Das Komitee stellt das Problem zur Debatte.

(22) Das Problem steht zur Debatte.

このようにDiskussionとDebatteは極めてよく似た振る舞いをする。前章で見た生成メカニズムもほぼ同様であると見做してよからう。さて動詞erörternは前置詞格目的語をとる自動詞としての用法はなく、4格目的語をとる他動詞としての用法しかない。

(23) Das Komitee erörtert das Problem.

動作名詞 *Erörterung* の機能動詞との結合は、*Diskussion* とは少し異なる。たとえば

(24a) *Das Komitee führt eine Erörterung über das Problem.

(24b) *Das Komitee macht eine Erörterung über das Problem.

このように機能動詞 *führen* や *machen* とは結合しない。また機能動詞 *stellen* や *stehen* よりも *bringen* や *kommen* と結びつく頻度が高い。

(25) Das Komitee bringt das Problem zur Erörterung.

(26) Das Problem kommt zur Erörterung.

動詞 *bringen* や *kommen* はもともと移動表現が基本となっており、移動のためには幾ばくかの時間がかかる。これに対して *stehen* と *stellen* は状態表現が基本となっており、時間的には点的である。こうした機能動詞の意味的相違が動作名詞との結合のあり方に関与していることは確かであるが、そのマッチングの解明に関しては厳密な意味論的分析が必要となる。今後の課題である。

6. まとめ

本稿では動詞 *diskutieren* とその名詞化された動作名詞 *Diskussion* を取り上げ、コーパス分析に基づいて如何なる機能動詞と結合するのかを探った。そして結合によって出来た機能動詞構造が如何なる表現機能を有しているのかを明らかにした。さらに基礎動詞から如何なるメカニズムに基づいて機能動詞構造が生成されるのかを示し、動詞の名詞化における LCS の抽出と機能動詞との結合による統合 LCS の形成が重要な働きを担っていることを述べた。議論動詞は機能動詞 *führen* や *stellen*, *stehen* とともに用いられ他の発話動詞にはない独特の振る舞いを示す。「議論」は発話の一種であるが、集団的な発話であり、必ず相手がある。そして議論すべき内容（話題）がある。議論動詞の持つこうした意味特性が機能動詞との結合に関与しているものと思われるが、これについては稿を改めたい。今後の筆者の課題であり、この課題の解決のためにさらに詳細な意味論的分析を行いたいと考えている。

(なお、インフォーマントとして協力を惜しまれなかった愛知教育大学の Oliver Mayer 氏に感謝の意を表する。)

参考文献

- Duden (1977) : *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in sechs Bänden*. Mannheim
- Helbig, Gerhardt (1979) : *Problem der Beschreibung von Funktionsverbgefügen im Deutschen*. In: *Deutsch als Fremdsprache* 16
- Helbig/Schenkel (1983) : *Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben*. Tübingen
- Grimshaw, Jane (1990) : *Argument Structure*. MIT Press
- Jackendoff, Ray (1990) : *Semantic Structures*. MIT Press
- Klappenbach/Steinitz (1978) : *Wörterbuch der Deutschen Gegenwartssprache*. Berlin
- Langenscheidt (2005) : *Glosswörterbuch Deutsch als Fremdsprache*. München
- Polenz, Peter von (1955) : *Funktionsverben im heutigen Deutsch*. Wirkendes Wort 17, München
- Popadic, Hanna (1971) : *Untersuchungen zur Frage der Nominalisierung des Verbalausdruck im heutigen Deutsch*. In: IDS 9, Mannheim
- Pustejovsky, James (1995) : *The generative Lexicon*. MIT Press
- 小野尚之 (2005) : 『生成語彙意味論』日英語対照研究シリーズ9 くろしお出版
- 影山太郎 (1996) : 『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版
- 影山太郎 (1999) : 『形態論と意味』英語学演習シリーズ2 くろしお出版
- 在間進 (1994) : 「統語構造の意味機能」『ドイツ語研究』2 クロノス
- 納谷昌宏 (1993) : 「機能動詞構造の生成メカニズム」日本独文学会『ドイツ文学』第90号
- 納谷昌宏 (2008) : 「デキゴト名詞 Sprache と Rede について—LCS に基づく分析—」『三重中京大学研究フォーラム』第4号

コーパス

「Cosmas II」IDS (Institut für Deutsche Sprache), Mannheim

注

- ¹ Jackendoff (1990) および影山 (1996) S.90を参照のこと。
- ² Langenscheidt (2005) S.771を参照のこと。
- ³ Klappenbach/Steinitz (1978) S.828を参照のこと。
- ⁴ Duden (1977) Band 2 S.544を参照のこと。
- ⁵ Snは主格、Saは対格、pは前置詞、その他の記号についてはHelbig/Schenkel (1983) S.97を参照のこと。
- ⁶ 前置詞格目的語をとる非能格動詞。
- ⁷ 在間 (1994) S.139を参照のこと。
- ⁸ 影山 (1996) S.68を参照のこと。
- ⁹ 機能動詞 bringen と kommen は事例も少なく本稿で扱う紙面の余裕はない。このLCSは納谷 (2008) を参照のこと。
- ¹⁰ 影山 (1999) S.102を参照のこと。
- ¹¹ 特質構造は意味的特性を表示するもので、形式役割、構成役割、目的役割、主体役割の4つの役割から成る。Pustejovsky (1995) および小野尚之 (2005) を参照のこと。

(2015年9月17日受理)